

繩梯子

風兇 不弑王

『縄梯子』

シユールとも言えるその不思議な光景は、なんの前触れもなく、俺の目の前にあらわれた。部屋の天井から、いきなり縄梯子が降りてきたのだ。

ロフト付きではないし、屋根裏に収納があるわけでもない。築数十年というオンボロアパートの天井から、まるで緊急避難でも始まったかのように縄梯子がスルスルと伸びてくる。

休日の昼ちかくにようやく起き出した俺は、ボサボサの頭に寝巻きがわりのスウェットといういでたちで、ちょうど朝食と昼食をかねたカップラーメンを食べているところだった。ほお張った麺を口から垂らしたまま、思わず立ち上がる。

天井板に穴でも空いているのかと目をこらしてみるが、そんな様子もなかった。ただただ、あたりまえのように縄梯子が木目の間をすり抜けてくるのである。

昼に着こうかというところで、計ったように縄梯子が止まった。同時に俺は、食べかけの麺をゴクリと飲み込んだ。俺の頭にあるのは、そこから何者が降りてくるのだろうかということだった。

待つこと数分。不安まみれの期待とは裏腹に、いっこうに誰も現れそうにない。縄梯子は、ただの風変わりな飾り物と化して、かすかに揺れさえもしなかった。

「何なんだよ」

一種、なにか裏切られたような気持ちになった。

縄梯子に近寄り、片手でその縄を握って少しばかり引っ張ってみたが、びくともしない。

俺はカップラーメンをテーブルに置き、こんどは両手で縄梯子の強度を念入りに確かめた。なかなか丈夫そうだった。

縄梯子を登るのに理由などいらない。そこに縄梯子があるから登るのだ。などと、登山家めいたくだらない理屈を頭の中にめぐらせつつ、ついに縄梯子に素足のまま挑みはじめた。

なかなか難しい。重心をうまくかけないと、縄梯子がゆがんで登りづらい。ううむ、少し痩せたほうがいいかもしれないな。

なんとか数段登り、天井付近まで顔が近づいた。やはり目の前で見ても、まるで腕のよい職人が工作したかのごとく、きれいに天井板から縄梯子が生えている。俺は縄梯子の生えぎわを確認しようと手をのぼしてみた。

「あっ」

俺の右手はなんの抵抗もなく、手首まで天井を突き抜けていた。映写機から投影された映像のように、まったくなんの感触もなかった。

何度か右手を天井板に出し入れしたあと、今度は思いきって頭を突っこんでみた。じつに奇妙な、そしてある意味、屈辱的ともいえる視界の変化だった。

天井板ギリギリの視点から見下ろすオンボロアパートの一室が、つぎの瞬間には、フローリングを舐めるような視点から見上げる、明るく広々とした豪勢な部屋へと切りかわっていたのだ。

縄梯子を登りきって、まず目についた巨大な窓ガラスに歩み寄ると、そこには遥かな高みから大都会を一望する、豪快なパノラマが広がっていた。どうやら、高層マンションの一室のようだった。

振り返ると、俺の部屋の倍もあろうかという高さの天井には、キラキラ輝くシャンデリアがぶら下がり、五十畳ほどと思われるスペースをぐるりと囲む壁には、巨大テレビやバーカウンターが設置され、濃いブラウンの床材の上には、猛獣の毛皮のラグが敷かれ、高級そうな応接セットやトレーニング機器などが置かれていた。

このハイグレードな部屋の中で、よれよれのくたびれたスウェット姿の俺だけが、異質な存在だった。

「いらっしやい」

突然、男の声がした。聞き覚えのある、なぜかとても馴染み深い声音だった。

「だ、誰だ」

部屋の入り口にたつ声の主を見て、俺は驚き困惑しながらも、そう感じたことに納得した。そこにいたのは俺自身だったのだから。

いや、正確には、基本的に俺自身だった、と言ったほうがいいかもしれない。なぜならば、その男はブランド物の洗練された衣服に身を包んでいたからだ。よれよれのスウェットとは歴然とした違いである。

それに、売れっ子の美容師にでも整えてもらっているのか、髪形もとても洗練されていて、千円カット常連のこの俺とは雲泥の差だった。顔つきさえも生気の有り無しで、好対照に明暗を分けていた。

微笑みを浮かべながらその男が答えたのは、まさしく俺と同じ名前だった。

「驚かせたようで申し訳ないね。いきなりだったから無理もない。君の疑問にはちゃんと答えるから、まずはそこに座ってくれ」

そいつは狼狽える俺に、レザー張りのソファをすすめた。

言われるがまま、おずおずと長ソファに腰掛けはしたものの、素足に感じる猛獣の毛皮が妙に気になって、なにか落ち着かない。

とりあえず飲み物でもと差し出されたコーヒーを口に含むと、芳醇な香りが鼻へと通りぬけた。インスタントとは違う。旨いコーヒーを飲んでいやがる。何度目かの嫉妬を感じながらも、気持ちがだんだんと落ち着いてゆく。

「縄梯子、びっくりしただろう」

向かいの一人掛けソファに身を沈めて脚を組み、そいつはニヤけて聞いてきた。

「あたり前だろ」

俺は無然として答えた。

「まあ、そう怒るなよ。じつは君にとって悪くない話があるんだ」

訝しげに睨みつける俺をなだめるように、そいつは言った。

「パラレルワールドって聞いたことあるかい」

「パラレルワールド……。ああ、聞いたこと、あるにはあるが、まさか」

そいつは嬉しそうに俺の言葉をさえぎった。

「そうさ、そのまさかだよ。あの縄梯子は、パラレルワールドを行き来するために、私が発明したんだ」

おいおい、いきなりSFかマンガの世界の話かよ。勘弁してくれよ、と言いかけて言葉を飲み込んだ。そうだった。俺自身ここに、あの摩訶不思議な縄梯子を登ってやってきたのだった。あり得ない話でもないのかもしれない。

俺は確かめるように、そいつに聞いた。

「じゃあ、こちらの世界では、お前が俺……なわけか」

「そういうことだね」

ううむ、それにしてお前は俺とは違い、ずいぶんと羽振りがいいじゃないか。そんな俺の心の声が聞こえたのか、そいつが続けた。

「パラレルワールドは無数に存在していて、それぞれが少しずつ異なった未来をたどるんだ。こちらの世界ではご覧の通り、私は発明家として大きな成功を取めているのさ。むこうの世界の君とは違ってね」

ふーん、こちらの世界の俺は、発明家で富豪で自分のことを私と言うようなやつで、その上たいそうなイヤミなんだな。たしかに俺は、むこうの世界では冴えないやつだが、あらためて言葉にされると、事実とはいえ腹立たしい。

そいつの俺さま自慢は、まだまだ続いた。

「この部屋の眺望、凄いだろ。百回建て億ションのペントハウスで、都内でも最高のロケーションなんだよ」

たしかにそうだった。こんな景色は初めて見た。でも、だからなんだと言うのか。

「あと、ほら。そこの写真。私のとなりの女性、けっこう美人でしょ。こちらの世界じゃすごく有名な女優なんだが、私の婚約者なんだよ」

言われたとおり、目の醒めるような美人が写っている。もう何年も彼女がいない俺にとっては、羨ましい限りだった。

すべてにおいて完敗だ。こうなったらもう、ふて腐れるしかない。

「はいはい、その大成功されているお方が、冴えない俺のような下層民に、いったい何の用があるんですかね。まさか贅沢自慢をするためだけに、わざわざ俺をおびき寄せたんじゃないだろうな」

「まさか。いくらなんでも、そこまで意地悪くはないさ」

よく言う。じゅうぶん意地が悪い。

「どうだい、この恵まれた環境の中で暮らしてみたくないか」

「えっ」

「だからつまりね、こちらの世界の私と、あちらの世界の君とで、入れ替わって見ないかということだよ」

耳を疑う申し出だった。そりゃあ俺だって、こんな暮らしをしてみたくないこともない。いや、むしろしたい。でも、コイツはどうなんだ。あちらの俺の暮らしぶりを体験したいとでも言うのか。だとしたら、よほどの物好きか変人か危険人物としか思えない。

「そんなに、俺のみじめな暮らしぶりに興味があるのか」

「だから、そんなに卑屈になるなって。私は、いまの生活に飽きてしまったんだよ。もう、それなりの富も地位も女も手に入れてしまったからね。人生でもっとも面白いのは、ゼロから成り上がる過程なんだ。私はもう一度それを味わってみたい、ただそれだけなんだよ」

何を贅沢ぬかしてやがるんだか。なめるんじゃねえぞ、俺の日陰者生活を。

いや、そんなに言うのなら存分に味わってみるがいい。こっちにだっていろいろ、大変な事情があるんだから。陽の当たらないオンボロアパートでインスタント食品を主食にし、女にまったく縁のない悶々としたアングラ生活を堪能しやがればいいんだ。

あとから泣き言ぬかしたって、俺の知ったこっちゃない。お前が苦しんで音をあげるころには、こっちは贅沢三昧、例の美女とねんごろにやってるだろうさ。

というわけで、俺はこの申し出を受けることにした。

「後悔するなよ」

「ありがとう、感謝するよ。こちらの世界では、君が何もしなくても特許料がたんまりと入ってくるからね。思う存分、残りの人生を謳歌するといいよ。それじゃあ、さらばだ。君の幸運を祈る」

そう言うなりそいつは、さっそく手ぶらのまま縄梯子を降りはじめた。

「えっ、もう行くのか。それに、何も持っていかないのか。知らんぞ、俺の部屋にはろくな物が無いんだからな」

イヤミなもう一人の俺は、手を振りながら濃いブラウンの床へと沈んでいった。俺は、すぐに縄梯子のあったあたりを手の平で確かめたが、ごく当たり前のように、ただのフローリングでしかなかった。

さて、たったいまから俺は、働かずとも大金が転がりこむ富豪になったわけだ。立派な住居もあれば、美人の婚約者もいる、生命の危険もない、なに不自由ない暮らしができるのだ。

あらためて冷静に考えれば、なんとめでたい日だろうか。少し間をおいたら、あまりのラッキーさに笑いがこみ上げてきた。そうだ、祝杯でもあげるとするか。

鼻歌まじりに、キッチンの大型冷蔵庫からシャンパンとつまみになりそうなものを探しだし、ふたたびソファへと陣取った。

「俺の未来に、乾杯っ」

シャンパンの味は、ひときわ格別だった。

大きな窓の外は、間もなく日が暮れようとしていた。徐々に下界に沁みてゆく闇の中に、点々と灯りが浮きあがりはじめる。あるものは明滅し、あるものは流れを作り、またあるものは何万年も昔からそこにあつた星のように、じっとしていた。

夜景を着に、酔いがほどよく回ってきた頃だった。平和な静寂を電子音がうち砕いた。テレビのリモコンに紛れて置かれていた携帯電話だった。

手にすると女の名前が表示されていた。とっさに頭に浮かんだのは例の女優の顔だった。どうする、シカトするか。だが、遅かれ早かれ、この女の相手もしなければならぬだろう。酔った勢いもあり、俺は思いきって通話ボタンを押した。

「はい、もしもし」

「出るの遅いっ」

最初のひと言で、気の強い女であることが察せられた。そうであるのならば、酔った振りでいなすのが無難というもの。まともな会話からボロが出て困るし、とりあえず、適当に相づちだけ合わせておくとしよう。

「いまだこなの、テレビの臨時ニュース見たでしょ」

「いや、家にいるけど、ニュースは見てない」

「じゃあ、いますぐにテレビをつけて。どこのチャンネルでもいいから」

俺は、わざとだるそうな返事をして、テレビをつけた。

実物以上の大きさに大画面テレビに映し出された男性のアナウンサーが、何やら深刻そうな面持ちで警告を発している。

「大陸から核ミサイルが多数発射されたんだって。そのうちの何発かが東京に向かって
いるらしいの。あと数分しかないから、あなたは急いで地下駐車場に避難して。私はた
またま伊豆でロケだったから、大丈夫だから」

携帯電話の向こうから女が急かしたてる。

なんだって、冗談じゃないぞ。いっきに酔いが醒めた。

「自衛隊か米軍が迎撃するんじゃないのか」

「全部を迎撃するのは無理かもしれないって。だから、とにかくいますぐに避難して」

画面の中ではアナウンサーが、一人でも多くの人に危機を伝えねばならぬという使命感からなのか、いまだに警告を発し続けていた。彼は、殉職するつもりなのだろうか。いや、他人のことを気にしている場合ではない。俺もいますぐに逃げなければ。

「必ず生きのびてね、愛しているわ」

泣き声まじりになった女を適当にあしらい、携帯電話を切った。映画でいえば、ひとの愛情の深さを表現するだいじな場面であるのだろうが、なにせ俺はその女に一度も逢ったことが無いのだから、致し方ない。

それにしても、せつかく手にした幸運が、こんなにも早く崩れ落ちてしまうなんて。巨大な夜景の窓ガラスに、ソファから立ち上がる俺が映っていた。

その落胆したスウェット姿のむこうに、閃光が奔った。

瞬間、視界がハレーションを起こし、俺の淡い幸福はすべて、光の中で消え去った。

オンボロアパートの一室で、部屋に似合わぬブランド服を着た男がつぶやいていた。「あぶない、あぶない。あわや、全面核戦争に巻き込まれるところだった。もしあいつがもう少し物分かりの悪いやつだったら、完全にアウトだっただろう」

せまい部屋の中をひと通り物色したが、案の定、たいした物も金も見当たらなかった。だが、男はさほど気にするでもなく、どっかりと畳の上にあぐらをかいた。

「やはり政治家への献金はしておくものだな。あの政府閣僚からのリークが無ければ、いま頃は地獄の一丁目だった。金と政治家は使いよう、ということだ」

男が上着の内ポケットから携帯端末を取りだし、いくつかの操作をすると、画面に何やらリストが表示された。

「いままでに手にいれた、この膨大な特許技術を登録すれば、こちらの世界でもすぐに富豪になれるだろう。金があれば、地位も美しい女も手にはいる。もとの生活レベルに戻るのはあつと言う間さ。さて、それはそうと、落ち着いたたら少し腹が減ってきたな」

男は散らかった台所からカップラーメンを見つけだし、お湯を注いだ。

三分間待つあいだに縄梯子の点検を素早くすませ、携帯端末の画面を指で軽くたたいた。すると縄梯子が音もなく天井板へと吸いこまれていき、まるで何ごとも無かったかのように、ただのオンボロアパートの一室へと戻った。

「この世界で三つ目か。なかなかまともなパラレルワールドに巡りあえないなあ」

携帯端末を上着の内ポケットに戻し、息を吹きかけながら麺をすすりはじめる。

その時、玄関の呼び鈴が鳴った。

食べはじめたばかりだし、借金取りだと面倒臭いので、男は居留守を決めこむことにした。しかし、相手はなかなか諦めない。扉が激しくノックされた。

どうやら居留守の目論見は、この相手には通じないようだった。それどころか、とうとう鍵が解錠されて、いきなり数人のいかつい男たちがなだれ込んできた。

「なっ……」

男は、ほお張った麺を口から垂らしたまま、抵抗する間もなく身柄を取り押さえられていた。

一団のうちの一人が、男の上着の内ポケットから携帯端末を奪いとり、他の者が部屋の隅に置かれていたノートパソコンを調べはじめた。

「警部、政府サイトおよび防衛省へのアクセスの痕跡を確認。大陸国のサーバーへ侵入、工作の形跡もあり。やはり間違いありません」

「そうか。ようやく捕まえたぞ、サイバーテロリストめ。お前のせいで日本は、危うく核戦争に巻き込まれるところだったんだ。外患誘致罪で死刑になるがいい」

警部はそう言うと、男の両手首に手錠をかけた。

男は目を白黒させながら、食べかけの麺をゴクリと飲みこんだ。